



「100分de名著」に『克蘭フォード』を

大野 龍浩

根っからの訥弁で、人望もないのに、縁あって、日本ギaskell協会会長の責任を負うことになった。第6代になる。<sup>1</sup>もとより、協会のためなら何でもする覚悟でいたので、流れに任せた。「会長」という名がつく職に就くのは、中学校の生徒会長以来。

ギaskellの小説の中で名著を一冊あげるとすれば、何か。『克蘭フォード』？ それで、NHK「100分de名著」のディレクターに手紙を書いた。この古典がもし番組で紹介されれば、日本中の人々にギaskellを知ってもらえる。しかし、届いた返事から、現実の厳しさを思い知らされた——「もっと有名で取り上げていない作品がたくさんある。優先順位は低い」。

<sup>1</sup> 歴代の三役は以下のとおり（敬称略）。

大会	設立準備	1	2	3	4	5	6	7	8	9
西暦	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
元号	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9
期	1		2		3		4		5	
会長	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子
副会長	中岡 洋	中岡 洋	中岡 洋	中岡 洋	中岡 洋	中岡 洋	中岡 洋	中岡 洋	中岡 洋	中岡 洋
事務局長	久永東輝夫	久永東輝夫	久永東輝夫	久永東輝夫	久永東輝夫	久永東輝夫	久永東輝夫	久永東輝夫	久永東輝夫	多比羅眞理子

10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19
6		7		8		9		10	
山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	山脇百合子	鈴江瑋子	鈴江瑋子
中岡 洋	小池 滋	小池 滋	小池 滋	小池 滋	小池 滋	小池 滋	小池 滋	東郷秀光	東郷秀光
多比羅眞理子	多比羅眞理子	多比羅眞理子	多比羅眞理子	多比羅眞理子	多比羅眞理子	多比羅眞理子	多比羅眞理子	長瀬久子	諸坂成利

20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30	令和元
11		12		13		14		15		16	
鈴江瑋子	鈴江瑋子	多比羅眞理子	多比羅眞理子	多比羅眞理子	多比羅眞理子	鈴木美津子	鈴木美津子	鈴木美津子	鈴木美津子	木村晶子	木村晶子
東郷秀光	東郷秀光	大野龍浩	大野龍浩	大野龍浩	大野龍浩	大島一彦	大島一彦	大島一彦	大島一彦	松岡光治	松岡光治
諸坂成利	諸坂成利	諸坂成利	諸坂成利	諸坂成利	市川千恵子	石塚裕子	石塚裕子	石塚裕子	石塚裕子	木村正子	木村正子

役員はベテランから若手まで年齢が散らばるように依頼した。お引き受け下さった方々には感謝するばかり。協会の運営が滞りなく進むよう誠心誠意尽くすので、会員各位のご協力を衷心よりお願いする次第。

少しでもギヤスケルが世間に知られるようにするためには、着実な研究活動と継続的な広報活動によって、作者と作品の魅力を地道に社会へアピールしていくのが効果的。そして、いつかの日か NHK から「番組で取り扱わせて下さい」と依頼が来るような作家にしたいものだ。

◆◆◆新刊紹介（2019年度）◆◆◆（掲載情報は2020年3月15日までに報告されたものです。）

市川千恵子・大田美和・木村晶子ほか共著『めぐりあうテキストたち——ブロンテ文学の遺産と影響』春風社、2019年

大野龍浩著 *Literature as Theology: The Parable of the Prodigal Son in the Fiction of Elizabeth Gaskell.* 彩流社、2020年

多比羅 眞理子編著、遠藤花子・太田裕子・大前義幸・木村正子・関口章子・長浜麻里子・中村美絵・波多野葉子・矢嶋瑠莉共著『ギヤスケル作品小事典』開文社出版、2019年

矢次 綾著『ディケンズと歴史』（松山大学研究叢書 第101巻）大阪教育図書、2020年

ディアドリ・ル・フェイ著、直野裕子ほか共訳『ジェイン・オースティン 家族の記録』彩流社、2019年

\*新刊書の情報を事務局<ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp>までお寄せ下さい。締切は2021年3月15日です。

### 第31回例会レポート

日時：2019年6月1日（土）14時～

会場：関西学院大学 大阪梅田キャンパス 1005 教室

開会の辞：日本ギヤスケル協会会長

木村 晶子（早稲田大学教授）

研究発表：司会 松本 三枝子（愛知県立大学名誉教授）

1. *Cranford* における性の受容

発表者 谷 綾子（龍谷大学専任講師）

2. 成功の場、墮落の場、救済の場——George Eliot 作品との比較でみる「外の世界」

発表者 濱 奈々恵（福岡大学外国語専任講師）

講演：司会 鈴木 美津子（東北大学名誉教授）

*Cousin Phillis* 再考——「祈り」に着目して

講演者 足立 万寿子（元ノートルダム清心女子大学教授）

閉会の辞 16:50 日本ギヤスケル協会副会長

松岡 光治（名古屋大学教授）



（撮影：大野龍浩）

## 研究発表

### 1. Cranford における性の受容

本発表は、フロイトの理論に基づき、Deborah と Miss Matty が超自我である父の呪縛を乗り越えタブー視してきた性を受容していく過程について考察したものである。Deborah は家族コンプレックスにより父の愛情を独占するため弟 Peter を排斥しようとしていた。Deborah の秘められた願望は図らずも成就し、Peter は Cranford から去っていく。弟の代わりに父の後継者としての地位を獲得した Deborah は自らを男性化し、男性の愛情を受け入れようとする女性としての正常な自我の発達は見られない。その Deborah の女性性を目覚めさせたのが Brown 大尉であった。彼の死に際して、Deborah は謝罪の言葉を発し、Peter の失踪以来、長いこと抑圧してきた罪悪感から解放された。後に Deborah は Jessie Brown の母親としての役割を果たし、女性性を回復することができた。

Miss Matty は父の代理人である姉の Deborah によって自我を抑圧された人物として描かれている。Miss Matty の性の受容は、姉からの独立の過程と重なる。最終的に姉から自立した Miss Matty は自分の果たせなかった身分違いの恋の成就を Hoggins 夫妻の中に見出して、自分の Holbrook 氏への思いを、ひいては自分のセクシュアリティを認めることができたのだ。(谷 綾子)

### 2. 成功の場、墮落の場、救済の場——George Eliot 作品との比較でみる「外の世界」

本発表では、George Eliot 作品との比較をもとにして、Elizabeth Gaskell が描く「外の世界」について考察した。その特徴を挙げると二つあり、一つは Cranford (1851-53) のように「外の世界」が経済的な成功と結びつくことである。もう一つは、Mary Barton (1848)、“Lizzie Leigh” (1850)、Ruth (1853) のように「外の世界」と「墮ちた女」が切り離せないことである。Gaskell は実生活において「墮ちた女 (16 歳の少女)」を救済の目的で国外に移住させたが、Gaskell が描く「墮ちた女」は誰一人として国外に移住していない。Gaskell にとって彼女たちの「国外移住」は必ずしも良い解決策ではなかったようだ。その代わりに、Gaskell は Mary Barton から Ruth に至るまでの間に「墮ちた女」への理解を深め、同時に「墮ちた女」を取り巻く社会的環境に批判を強めていく点を指摘した。今後の研究において、「墮ちた女」の救済や移民を支援した Lady Burdett-Coutts と Caroline Chisholm についての研究を深め、Gaskell との接点や Gaskell に対する影響について考察したい。(濱 奈々恵)

### 講演： Cousin Phillis 再考——祈り」に着目して

本講演では、論考の対象として『従妹フィリス』(1863-64) が取り上げられ、この作品に散見する祈り、とりわけホールマン師の祈りと使用人のベティやティモシーの口には出さない無言の祈りに注目し、祈りの機能が仔細に分析された。足立氏は、ホールマン師の祈りを①「牧師としての公的祈り」、②「牧師かつ一個人としての半公的・半私的祈り」、③「一個人の私的な祈り」の3つに分類し、特に②と③の祈りの機能を重点的に論じた。示唆的だったのは、使用人のベティやティモシーの無言の祈りを「水」と「光」というキリストのエンブレムを用いて論証したことである。本講演の最後に、岡山出身の作家坪田譲治の「河童の話」と『従妹フィリス』の比較考察がなされた。登場人物の河童とホールズワースに焦点を当て、汽車や光を鍵語として用いることによって、両作品の類似点が浮かび上がってくるプロセスは刺激的であった。祈りを切り口に『従妹フィリス』を分析した本講演は、足立氏のお人柄が滲み出るきわめて味わい深いものであり、感銘深かった。(鈴木 美津子)

### 「例会に参加して」

第31回例会は、2019年6月1日(土)、関西学院大学大阪梅田キャンパスにて開催された。当日は、例会を盛大にお祝いするような見事な快晴であった。はじめに木村晶子会長の開会の辞で開会した。次年度からは日本ギヤスケル協会の例会がなくなり、年に1回しか開催されないことを改めて会員に発表された。

まず松本三枝子氏の司会で研究発表が行われた。第一発表者の谷綾子氏(龍谷大学専任講師)の「Cranford における性の受容」と題する研究発表が行われた。フロイトの精神分析批評を基に Cranford に登場する Deborah と Miss Matty の2人の意識と無意識による自我の構築について発表があった。特に聴衆者の関心を引いたのは、Deborah が意識から無意識を自覚し、自我に気づき、超自我へと続いていく過程は、一級品の職人技であるかのように、フロイト理論を駆使して細部に渡る作品解釈をした発表であった。

第二発表者の濱奈々恵氏(福岡大学外国語専任講師)の「成功の場、墮落の場、救済の場——George Eliot 作品との比較でみる「外の世界」と題して、ギヤスケルは墮ちた女を救済目的で外国へ移住させたが、彼女の作品の中では、墮ちた女は国外に出さず、それぞれ違う形で彼女たちの結末を迎えさせている。そこに焦点を当て、Mary Barton、“Lizzie Leigh”、Ruth の三作品を比較し、ギヤスケルの姿勢を考察した。外の世界、墮ちた女のその後、残された家族の姿、そのはざまに生きる姿や生活に着目した発表で、非常に面白い内容であった。

休憩後、鈴木美津子氏の司会で、足立万寿子氏(元ノートルダム清心女子大学教授)が「Cousin Phillis 再考——「祈り」に着目して」の講演が行われた。ホールマン師やフィリスの祈りには、罪を犯したことや自由意思をもって神に背いたことから救済する祈りであることを論じられた。さらに氏は、岡山県出身の坪田譲治の「河童の話」を用いて河童とホールズワースとの「光」に関して比較考察された。氏は「ウルトラ級の結び付けを行っての結論です」と仰っていたが、日本人が当たり前のようにして行う自然崇拝の祈りに関しても考えさせられる講演だった。

最後に松岡光治氏による閉会の辞で閉会となった。例会終了後の懇親会は、梅田の AMARANTI で盛大に行われ、谷氏、濱氏、足立氏を囲んでの和やかで楽しい会であった。本年度の例会開催に当たりご準備等お世話頂いたすべての先生方に深謝申し上げます。  
(大前 義幸)

### 第 31 回大会レポート

日 時：2019 年 10 月 5 日 (土) 午後 1 時より

会 場：実践女子大学 渋谷キャンパス 603 教室

開会の辞：日本ギヤスケル協会会長

木村 晶子(早稲田大学教授)

シンポジウム：「イギリス小説における黒人の表象あるいは不在」

「19 世紀小説における黒人の不在——ギヤスケル、ディケンズ、サッカリー」

司会・パネリスト 石塚 裕子 (神戸大学名誉教授/盛岡大学教授)

「“A Negro had a soul?”: 18 世紀イギリス文学における黒人表象」

パネリスト 武田 将明 (東京大学大学院准教授)

「‘Rather a Friend to the Abolition’——ジェイン・オースティンの作品における「黒人」への言及」

パネリスト 新井 潤美 (東京大学大学院教授)

「Harriet Martineau から George Eliot へ——反奴隷制から人種問題へ」

パネリスト 松本 三枝子 (愛知県立大学名誉教授)

総 会：総合司会 事務局長 木村 正子 (岐阜県立看護大学専任講師)

講 演：司会 宇田 和子 (埼玉大学名誉教授)

「拒絶する女たち——マライア・フルアート、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル」

講演者 鈴木 美津子 (東北大学名誉教授)

閉会の辞：日本ギヤスケル協会

大野 龍浩 (熊本大学大学院教授)



(撮影：大野龍浩)

シンポジウム：「イギリス小説における黒人の表象あるいは不在」

18 世紀小説には黒人が描かれている。また、時代が下って 19 世紀後半ともなれば、植民地からやってきた黒人やインド人などがふたたび登場する。ところが 19 世紀の前半から中期にかけて、なぜか小説の中から黒人が消えている。本シンポジウムでは 18 世紀から 19 世紀中期小説の中で黒人がどのように表象され、扱われてきたのか、あるいは不在となっていたのかを検討した。

「“A Negro Has a Soul?” : 18 世紀イギリス文学における黒人表象」

本発表では、アブラ・ベーンの『オールノーコ』(1688)、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』

(1719)と『ジャック大佐』(1722)を取り上げ、17世紀末から18世紀初期のイギリス小説における、土着性を剥奪された他者としての黒人(奴隷)の表象が、小説というジャンルの成立にとって決定的な意義を持つことを示した。

この事実は、サミュエル・リチャードソンの『パミラ』(1740)に至って隠蔽されるが、排除しきれない外部のように、本作品の終盤において、ジャマイカからイギリスに送られ、すぐに瘡癩で亡くなる「十歳くらいの黒人の少年」が登場することも述べた。おそらく、『パミラ』における黒人の排除は、19世紀イギリス小説に通じる問題であろう。

最後に、ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』(1759-67)は、黒人女性が登場する点で画期的とはいえ、ここで描かれる共感の対象としての黒人像は、これ以前の作品に登場する他者としての黒人とは異なり、かえって西洋的な世界への他者の取り込みを意味する恐れがあることも指摘した。

最後に、『ロビンソン・クルーソー』からの文体的な影響が元奴隷の黒人作家オラウダ・イクイアーノによる自伝『アフリカ人、イクイアーノの生涯の興味深い物語』(1789)に見られることを指摘し、奴隷貿易によって近代の矛盾を象徴する存在にさせられた黒人たちが、近代小説に重要なインスピレーションを与え、そこで成立した文体を今度は黒人たちが使用するという形で、イギリスにおける黒人たちの声はついに聴かれるようになった、という点にも(もちろん、上記の共感による取り込みの危険性は常にあるものの)注意を促した。(武田 将明)

### 「Rather a Friend to the Abolition」——ジェイン・オースティンの作品における「黒人」への言及

ジェイン・オースティンの作品にはいわゆる「黒人」の登場人物はでてこない。未完の小説『サンディトン』では西インド諸島出身の‘half mulatto’の若い女性への言及があるが、登場する前に原稿は終わっている。一方で、奴隷貿易への言及があるのは周知の通りである。『マンスフィールド・パーク』では主人公のファニー・プライスが、西インド諸島に地所を持つサー・トマスに奴隷貿易について尋ねる場面がある。いとこのエドモンドはファニーの質問がおじを喜ばせただろうと語る。このことから、サー・トマス自身は奴隷貿易に関して、良心の呵責がなかったことが読み取れる。当時は「良識ある知識人」は奴隷貿易廃止を主張してきたが、それが一つの「流行」にまでなっていた。オースティンは『エマ』では、最も浅薄で不愉快な登場人物であるエルトン夫人に「奴隷貿易反対」の発言をさせている。エルトン夫人はまさに何も考えずに「奴隷貿易反対」という「流行」にのる人物として描かれている。いかにもオースティンらしい、シニカルな「奴隷貿易」の扱い方だと言えるだろう。(新井 潤美)

### 「19世紀小説における黒人の不在——ギヤスケル、ディケンズ、サッカリー」

そもそも何をもって黒人と称するのか。その出生は様々である。19世紀中期でアフリカ系黒人を描く小説を見出すことは容易くない。ギヤスケルは『クランフォード』の中で20数年ぶりにマティのもとを訪れたインド帰りのいとこの引き連れてインド人下僕を物珍し気に「青いげ」のようだと述べ、最後に再度現れるピーターの話にも、『シンドバッド』や『アラビアン・ナイト』など浮世離れた東方のメルヘンを感じている。

ディケンズも小説では『ドンビー・アンド・サン』にインド人従僕が登場している程度だ。サッカリーは『虚栄の市』の中でシュバルツという混血児を金があるだけの馬鹿者と軽蔑げに描いている。なぜ18世紀のノーブル・サヴェジから、小説に登場する価値もない卑しい存在へ変容したのか。フランス革命、そしてレッセフェールと支配階層を取り巻く環境変化、また奴隷制廃止から帝国主義へと国家戦略の変化などが考えられる。さらに南北戦争、ジャマイカ騒動によって人種差別への意識がイギリスに拡大していったように思われる。(石塚 裕子)

### 「Harriet Martineau から George Eliot へ——反奴隷制から人種問題へ」

ユニテリアンのマーティノーは、20代のころから一貫して奴隷制廃止論者でした。彼女の出世作となった *Illustrations of Political Economy* のシリーズにも *Demerara* と題された植民地での奴隷制を批判する物語があります。今回扱った *The Hour and the Man* は、黒人奴隷からハイチ革命の指導者となり、宗主国フランスのナポレオンと闘った Toussaint L'Ouverture を主人公にした歴史物語です。

ここに描かれるトゥサンは、エピクテトスを読みふける思索的な人物で、彼の理想とするハイチは、白人と解放された黒人が共存する国でした。このように白人と対等に行動することができるトゥサンは、奴隷制廃止小説が描く黒人像の典型を超えるものでしたが、彼の人間性や普遍性を強調するため、トゥサンが黒人であることや人種対立への言及が抑制される結果になっていることを指摘しました。

19世紀後期に活躍した George Eliot は、Harriet Beecher Stowe の反奴隷制小説を高く評価し、書評も書いています。エリオットが後期小説で、積極的に *nationality* や *ethnicity* を扱うようになった要因の一つに、ストウの影響があったことを二人の書簡から分析し、彼女の最後の長編小説である *Daniel Deronda* を考察しました。(松本 三枝子)

### 講演：「拒絶する女たち — マライア・フルアート、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル」

ロマン主義時代の英国小説には、社会的地位の高い男性からの求婚を撥ね付ける女性がしばしば登場する。これは、私的なものである求婚を公共の場に提示し、社会体制を批判する手段だった。発端として、Frances Burney, *Evelina* (1778)において、*Evelina* は伯爵からの求婚を歓喜して受け入れたが、当時の家父長制社会を支持しているとして批判を呼び「拒絶する女」を生むこととなった。その後、Robert Bage, *Hermesprung* (1796)で

は、才気煥発な Maria が男爵からの求婚を拒絶する。腐敗した貴族階級への批判である。Sydney Owenson, *Ida of Athens* (1809)では、父はギリシャ人、母はイギリス人の Ida が、イギリス人を拒絶し、ギリシャ人と結婚する。ギリシャ独立にはギリシャの自立した運動が必要という政治的メッセージである。Jane Austen, *Pride and Prejudice* (1813)では、Elizabeth は国教会牧師や地主の求婚を拒絶する。これは体制批判の表明である。約 40 年後の Elizabeth Gaskell, *North and South* (1854-55)になると、Margaret は弁護士を拒絶し、労働者階級出身の高潔な資本家と結婚する。Gaskell は望ましい英国社会は、多様な価値観が併存すべきことを示唆しているのである。

講演は詳細なハンドアウトのもと、Mary Wollstonecraft, Edmund Burke 等への言及を含み、政治・社会を軸に、拒絶の歴史が広く深く読み込まれ、実にわかりやすく話され、聴衆の知見を広げ深めるものであった。  
(宇田 和子)

### 「大会に参加して」

10 月とは思えぬほど強烈な陽光 (31℃) に恵まれた第 31 回大会。日本語による「イギリス小説における黒人の表象あるいは不在」というシンポジウムの現代的意義を考えながら拝聴しているうちに、少しずつ視界が開けていくのを感じた。各々の作家が「黒人」をいかに描いたか（あるいは描かなかったか）というレベルに留まらず、反奴隷制から大英帝国における（東洋人を含む）人種差別問題へとテーマが敷衍されたことにより、「日本人英文学研究者」の存在意義を聴衆が自覚できる仕組みになっていたのではないだろうか。会場にひとりでも「黒人」、あるいは「黒人」を家族や親しい友とする人がいれば、どのような質疑応答が交わされたのだろうと思いながら懇親会へ。発信言語のバランスに苦慮している駆け出し研究者にとって、「これからの方々には海外ジャーナルへの論文投稿と日本語による著作を両立していただきたい」という先生方からの激励は何より嬉しく、ありがたいものだった。穏やかな知性あふれるギヤスケル協会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。  
(平倉 菜摘子)

## 日本ギヤスケル協会事務局報告

### 1. 役員会報告

#### 1) 2019 年度第一回役員会 (6 月 1 日 (土) 11 時 30 分～13 時、関西学院大学大阪キャンパス 14F 会議室)

##### ① 経費節減について

ML・HP・伝助利用により通信費及びその他経費の大幅削減が可能となった。

本年度より年会費払込の手数料を協会負担から会員負担へと変更した。

##### ② 2019 年度「ニューズレター」配信について

PDF 版での発行とし、ML および HP にて配信。ML 未登録者にはプリントアウトを郵送。

##### ③ 『ギヤスケル論集』第 29 号 (2019 年度発行) について

本号は「山脇百合子先生追悼号」とし、顔写真、経歴、追悼文を掲載する。

書評本は ILL 利用、研究費購入、大学図書館での購入を依頼する。協会負担はなし。

##### ④ 2019 年度例会について

本例会は関西学院大学の後援を受けている。ポスター (PDF 版を ML にて配信) にその旨を記載し、例会終了後に研究活動情報を同大学あてに提出する。

##### ⑤ 第 6 代日本ギヤスケル協会会長に大野龍浩氏が選出され、承認された。

##### ⑥ 2020 年度年次大会について

従来の例会と大会を年一回の全国大会に集約し、午前からの開催とする。

#### 2) 2019 年度第二回役員会 (10 月 5 日 (土) 11 時～12 時 30 分、実践女子大学渋谷キャンパス 611 会議室)

##### ① 第 17 期新役員 (2020 年 4 月～2022 年 3 月) の承認を得た。

##### ② 「19 世紀イギリス文学合同研究会」について

ディケンズ・フェロウシップ日本支部支部長新野緑氏による提案で、各個人作家研究学会の会員数限数に伴い、他学会との 19 世紀英文学研究・人的交流を活性化することを目的とする。日本ギヤスケル協会はこの合同研究会に参加する方向であるが、準備大会 (2021 年度開催予定) までに審議すべき事項が多数あり、次期役員会で引き続き審議を行う。

##### ③ 2019 年度大会について

本大会は事前に実践女子大学に対し補助金申請を行っており、受理されている。

##### ④ 2020 年度の活動予定

2020 年度年次大会は、10 月 10 日 (土) 日本赤十字看護大学にて開催予定。

### 2. 総会報告

##### ① 2018 年度決算報告および 2019 年度予算案が承認された。

##### ② 第 17 期新役員 (2020 年 4 月～2022 年 3 月) が承認された。

##### ③ 2020 年度より学生会員の会費値上げについて承認された。

##### ④ 「19 世紀イギリス文学合同研究会」に関する意見交換がなされた。

2021年度に予定されている準備大会に参加する方向で次年度から検討してゆくことが承認された。

第17期新役員（2020年4月～2022年3月）

会長：大野 龍浩（立正大学教授）

副会長：松岡 光治（名古屋大学教授）

事務局長：芦澤 久江（静岡英和学院大学短期大学部教授）

幹事（五十音順）：宇田 和子（埼玉大学名誉教授）、遠藤 花子（日本赤十字看護大学専任講師）、閑田 朋子（日本大学教授）、齊木 愛子（熊本大学非常勤講師）、瀧川 宏樹（大阪工業大学特任講師）、玉井 史絵（同志社大学教授）、西垣 佐理（近畿大学准教授）、松本 三枝子（愛知県立大学名誉教授）、村山 晴穂（元三育学院短期大学教授）

会計監査（五十音順）：猪熊 恵子（東京医科歯科大学准教授）、早川 友里子（大妻女子大学専任講師）

（木村 正子）

## 事務局報告（2018年度）

### 2018年度日本ギヤスケル協会会計報告（2018年4月1日～2019年3月31日）

#### 2018年度一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	547,570	例会費	85,000
年会費	490,000	大会費	35,000
（英国協会費を含む）		印刷費	275,000
懇親会収入	2018年度より別 会計のため計上 しない	通信費（送料＋ 手数料＋年会 費振替手数料）	70,000
		事務費	5,000
		（小計）	470,000
		英国協会費	90,000
		研究会補助費	3,000
		書評書籍費	30,000
		（小計）	123,000
		支出合計	593,000
		次年度繰越金	444,570
合計	1,037,570		1,037,570

#### 2018年度一般会計決算

収入		支出	
前年度繰越金	547,570	例会費	81049
年会費	451,000	大会費	35000
（2018年度）	(341,000)	印刷費	203891
（過年度）	(20,000)	通信費	55815
（英国協会年会費）	(90,000)	事務費	7001
仮入金（返金対象）	4,500	（小計）	382756
		英国協会	94017
		研究会補助費	3,000
		書評書籍費	23533
		雑支出	16375
		（小計）	(136925)
		次年度繰越金	483389
合計	1,003,070		1,003,070

特記事項

2018年度大会の講師招聘にあたり、宇田和子氏より航空券代の寄付があった。当該寄付については、個人間での授受のため、日本ギヤスケル協会の一般会計には組み入れないものとする。

上記の通り相違ありません。

日本ギヤスケル協会 2018年度事務局長 木村正子 ㊞

日本ギヤスケル協会 2018年度会計監査 足立万寿子 ㊞

日本ギヤスケル協会 2018年度会計監査 宇田朋子 ㊞

2019年度一般会計予算案

収入	(内訳)	支出	
前年度繰越金	483,389	例会費	70,000
年会費	500,000	大会費	70,000
当協会	400,000	印刷費	210,000
英国協会	100,000	通信費	60,000
		事務費	5,000
		アルバイト費	3,000
		(小計)	418,000
		英国協会費	120,000
		研究会補助費	3,000
		書評書籍費	0
		支出合計	541,000
合計	983,389	次年度繰越金	442,389
		合計	983,389



◆◆◆日本ギヤスケル協会 第31回大会 予告◆◆◆

日時：2020年10月10日（土）午後1時から

会場：日本赤十字看護大学

研究発表

「“Bran”——ウィリアム・ギヤスケルによる伝承詩の翻訳」

長浜 麻里子（東京農業大学非常勤講師）

「法廷内から法廷外での戦いへ——*Mary Barton* のメアリと *A Dark Night's Work* のエリノアを中心に——」

矢野 奈々（早稲田大学非常勤講師）

シンポジウム：「キリスト教で解読する G・エリオットとギヤスケル」

The Plan of Salvation in *Scenes of Clerical Life and Cranford*

司会・パネリスト：大野 龍浩（立正大学教授）

『アダム・ビード』と『ルース』における贖罪」

パネリスト：村山 晴穂（元三育学院短期大学教授）

3人目のパネリストおよび発表タイトルは未定

講演

「ギヤスケルとチャリティー——産業都市マンチェスターの言語空間」

大石 和欣（東京大学教授）

★ 次年度の研究発表を募集しております。お申し込みは12月末日までに事務局へメールにてお願い申し上げます。

◆◆◆研究会予定◆◆◆

2012年の発足以来、本研究会ではギヤスケルの短編・中編小説を読んでまいりましたが、今年度からは長編小説も取り上げる予定です。作品、日時、会場につきましては以下の通りです。変更がある場合は、日本ギヤスケル協会 HP に掲載いたしますので、新着情報をお確かめ下さい。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

作品： 2020年 5月 *The Life of Charlotte Brontë* (1857)  
※新型コロナウイルス感染症により中止。7月に順延予定。  
7月 *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* (1848) Ch. I-VII  
9月 *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* (1848) Ch. VIII-XIII  
11月 *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* (1848) Ch. XIV-XX  
2021年 1月 *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* (1848) Ch. XXI-XXIX  
3月 *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* (1848) Ch. XXX-XXXVIII

日時：奇数月 第2日曜日 午後2時～午後4時

会場：実践女子学園桜会館（東京都渋谷区東1-1-40 TEL:03-3407-7459）

<https://www.jissen.ac.jp/sakurakai/accessguide/index.html>

参加費（会場使用料）：300円程度

（長浜 麻里子）

..... 編集後記 .....

NLがwebでの公開となって2年目になります。2020年度より役員も新体制となり、今号は、新会長に就任された大野龍浩先生が巻頭を飾って下さいました。2020年度より例会と大会が併合され、秋の大会に一本化されることとなりましたが、ギヤスケルの研究が益々活気を増し、大勢の方々に参加して頂ければと思います。

最後になりましたが、NL作成にあたり、最後までご尽力下さいました木村晶子前会長、松岡光治副会長、木村正子前事務局長をはじめ、ご執筆くださった先生方に厚く御礼申し上げます。また、大野龍浩会長のご協力に厚く御礼申し上げます。（編集：遠藤 花子）

発行： 日本ギヤスケル協会  
〒422-8545  
静岡市駿河区池田1769  
静岡英和学院大学短期大学部  
芦澤久江研究室  
URL: <http://www.gaskell.jp/>  
e-mail: [ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp](mailto:ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp)

発行日： 2020年5月4日